

学位論文審査結果の要旨

所 属	三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻（博士後期課程） 看護学領域 母子看護学分野	氏 名	天北真弓
審 査 委 員	主 査 磯 和 勅 子 副 査 辻 川 真 弓 副 査 谷 村 晋		
<p>(学位論文審査結果の要旨)</p> <p>重症心身障害児の痛みの評価に関する研究</p> <p>著者らは論文において下記の内容を述べている。</p> <p>背景：重症心身障害児は、日常的に痛みを感じやすいが、痛みを言語で他者に伝えることが難しい。彼らの痛みの体験を理解するために、行動反応指標が活用されている。日常的な痛みにはPaediatric Pain Profile (PPP) (Hunt et al., 2004) の実用性が高いことが報告されているが、我が国では日常的な痛みを評価するツールはない。</p> <p>目的：痛み評価尺度PPP日本語版の信頼性と妥当性を検証し、臨床的有用性と重症心身障害児への適用を明らかにする。</p> <p>方法：PPPを和訳し、重症心身障害児30名の痛みを病院看護師3名が評価して信頼性と妥当性を検証した。看護師の特性が痛み評価に与える影響を検証するために、①重症心身障害児1名の痛みを病院看護師28名が評価、②重症心身障害児30名を担当看護師とそうでない看護師が評価し、看護師の経験年数、学歴、子どもとの関係性がPPP日本語版を使用した痛み評価に与える影響を分析した。PPP日本語版の有用性を検証するために、看護師31名に痛み評価を継続的に実践してもらった後、尺度項目の明瞭さ、実用性に関する質問紙調査を実施した。尺度使用前後での痛みの捉え方の変化に関する質問紙調査も実施した。第1～3研究で得られた重症心身障害児の160回分の痛み評価データを分析することで、重症心身障害児の属性が痛み評価に与える影響を検証した。</p> <p>結果：PPP日本語版の内的一貫性は高く（安静時：$\alpha=0.735$、痛み時：$\alpha=0.928$）、再テスト信頼性も良好であった（$r=0.846$）。測定者内信頼性は高く（$r=0.748$）、測定者間信頼性は中等度であった（$r=0.529$）。FLACCスケールとの併存妥当性（$r=0.629$）、構成概念妥当性も認められた（$p<0.001$）。子どものことをよく知る看護師は、そうでない看護師よりも痛みを高く評価した（$p<0.01$）。看護経験年数とPPP scoreとの相関関係は認められなかった。尺度の継続的な使用意思と看護経験年数との相関関係は認</p>			

められなかった。本研究対象者の重症心身障害児の痛みの特性は、年齢が低い子どもは医療依存度の高い超重症児が多く ($p<0.001$)、年齢が高くなると側彎が主な痛みの原因となった ($p<0.001$)。年齢が低い子どもの方がPPP scoreが高く ($p<0.01$)、医療依存度が高い子どもほど痛みの頻度は多かった ($p<0.01$)。

本研究は、痛みを言語で伝えることが困難な重症心身障害児の痛み評価尺度の日本語版を開発し、臨床的有用性と重症心身障害児への適応を明らかにした論文であり、学術上極めて有益であり、学位論文として価値あるものと認めた。